



「多様性とは」

文学部 3 年
平野友賀子

多様性とは、幅広く性質の異なるものが存在することである。
当たり前のことだがそんなことは普段気にせずに生活している。

私は多様性について考えさせられた授業がある。心理学科での授業である。それは発達検査と知能検査の実施法と結果の解釈法を習得する授業で、発達障がいのある人をケースとして取り上げ、心理検査を実施し、その支援策を考えていくという内容だった。

その授業の中で先生が発達障がいの支援者は
「治す」「正す」よりは「活かす」
「治す」「正す」よりは「補う」という考えが大切だと言っていた。
つまりその人の強みを活かし、苦手なところは補うということである。

それを聞いて私は昔の記憶がよみがえってきた。
私が小学生のころの話になるが、短い期間だったが近所に歳の近い男の子が住んでいた。
その子はおはなしが得意な男の子ではなかった。
しゃべる時に言葉がつまってしまうたり、どもってしまうのである。
そのしゃべり方をよく周りの男の子はからかっていた。
でも私はその子の話し方について気にしてなかった。むしろその男の子はいつもニコニコとしていて、穏やかな性格のいい子だなあと思っていた。
その後引越しの関係でその子とは離れてしまい、引越し後に会うことはなかった。

今考えると、その子は何かしらの障がいがあったのだと思う。
その当時の私はそれに気づけなかった。そしてからかっていた男の子も障がいを知らなかったのだろう、だからそれを認められずにからかかってしまったのだと。
そしてその子の優しい性格を活かして、苦手なおはなしを補ってあげられればよかったなと思った。

この授業は障がいについて考えるきっかけとなった。そして社会にはいろんな人がいて、それをもっと理解したいと思った。多様性、すなわち幅広く性質の異なるものが存在するということはどういうことなのかについて知りたいと思った。

法政には法政大学憲章というのがある。それには「人びとの権利を重んじ、多様性を認め合う「自由な学風」という精神を受け継いできた」と書かれている。
この法政大学憲章のようにわたしも多様性を理解したい。理解するには世界にはどのような立場の人がいるのか知る必要がある。私の学ぶ意欲につながった。
大学生生活は残り1年半。まだまだ学べる。



「いろいろのいろ」

文学部 2 年
新島綾音

それぞれの教室に、それぞれの色があつた。
その日はしとしとと小雨が降っていて湿度は高かった。ただでさえ薄暗い58年の廊下は一層息を潜めたかのようにしんとした黒を濃くしていた。立て付けの悪くなっている扉を開くと、先にいた人たちはみんな下を向いていた。スマホをいじっている者、課題をこなす者、寝てる者、まちまちであった。黒やこげ茶の頭が座席の前方から後方へと、示し合わせたかのようなバランスのよさでほぼ均等に並んでいる。わたしも做って周りと同じ位置に荷物を置いた。通気性がよくないのか空調が効いていないのか、水をたくさん含んだ空気は重くて、肺いっぱい吸い込むとそのまま内側から沈んでいってしまうような心持ちになった。教室の蛍光灯はそんなわたしのことなんて気付かないほどに白々しく光っている。

これが雰囲気なのだったと思った。58年館の、とある教室の、日本文学科の専門科目の授業の、雨の日の雰囲気。雰囲気というやつにわたしたちは意外と振り回されて生きている。
ILACの授業は他の学部の学生と一緒に授業を受けることのできる機会である。学部ごとに学生の雰囲気は違うとわたしは感じる。文学部は大人しいとか、経営学部はバリビが多いとか、学部のイメージというものとはステレオタイプ的な個人の偏見だと思っていたのだが、実際大学にいと火のないところに煙は立たないと思う。学部というカテゴライズのマクロ視点の話なので、個人個人を見れば必ずしもそうではないのはわかっているものの、目立つ部分がどうしてもイメージとしてピックアップされがちになってしまう。髪の色や友達関係、女の子の化粧の感じ。そんな個々の傾向が全体の傾向になって、それからその学部の雰囲気が生まれる。

なにがいい雰囲気かで悪い雰囲気なのかは人それぞれの感じ方であると思う。もしくは、好き嫌い、合う合わないで表されるものである。1年生のとき、他の日よりやけに疲れを感じる日があった。なんとなく、気持ちが置いてけぼりにされたような。心がついてこないような。毎週その曜日にそうなるものだから不思議だったのだが、今考えればわたしは雰囲気に振り回されていただけなのだろう。授業の雰囲気は先生の話し方、進め方、内容、学生の態度、天気、教室の場所、曜日、時間、色々なものが影響し合っている。毎回それらは微妙に変わっていくが、大まかな雰囲気というものもわかってくる。わたしは自分の学科の専門科目の授業が肌に合うらしい。他の教室で彩度の高い髪色の集団を見かけると萎縮してしまうから、その雰囲気の差で疲れてしまうのだと思った。これは、ただ他の雰囲気やコミュニティにわたしの性分や感覚がマッチしないだけで、おそらくそちらの方が良いという人がいるし、いるからその集団が形成される。

大学は雰囲気のデパートだ。自分の持っている色を手元に置きながら、各授業の色の中から合う授業を探していく。教室の持つ色は単色ではないからこそ、自分が馴染める色が必ず見つかるのだと思う。もちろんわたしたちだって、そうやって混色して混色して混色して行って、また違う色が馴染むようになって、違う色だってアクセントになってくるかもしれない。
わたしたちの色が溶け出して、教室の空気の色をまた作っていく。目に見えない循環型世界のことを考えた。



「空気読めよ」

経営学部 2 年
野口大智

「空気読めよ」という言葉がある。使用される状況は数あれど、多くの場合にこの言葉の根幹は「場の雰囲気を乱すな」へと収斂される。コミュニティを大切にしようとする意識の発露だと捉えれば、実に人間らしい行動と言えるだろう。しかしこれについて諸手を挙げて肯定するには、大きな問題が生じる。それは「場の雰囲気を正しく認識できる必要がある」ということだ。

例えば、大声で騒ぐ四人組がいるとしよう。その中の一人だけが一言も喋らず、ニコリともしなければ、その一人は四人組の和を乱していることになる。れっきとした「空気読めよ」の対象だ。けれど視点をもう一歩後ろに設定すれば、状況は大きく変化する。そこが授業中の教室だったらどうだろうか？ 勉強に励む多数がいる中で、大声をあげて騒ぐ三人、迷惑以外の何物でもない。疑う余地のない「空気読めよ」の対象である。

学生の過半数はすでに成人を迎えている。社会の制度としては、中身にかかわらず外形だけはすでに一人前の大人なのだ。最低限の「空気は読めて」然るべきではないだろうか。だということに、授業中に騒いでいることを注意されたり、携帯をいじっていることを注意されたり。挙句の果てには試験のたびに全体に対して不正行為をしないよう注意喚起がなされ、それでもなお不正行為を働く者が存在する。

実際問題、それらはすべて大人たちの問題である。是として行動しているのなら、少なくとも外野である私ごとやかく言うことでないのは重々承知している。本稿にも、それを糾弾する目的はない。

けれどそういった行為を、馬鹿だなあ…と思いつつ見ている者もいるということを知ってほしいのだ。そして小学生や中学生ならいざ知らず。こと大学生においては、すでにそう思う側がマジョリティであることに気がついてほしいのだ。

何を偉そうに、と読者は思うかもしれない。もちろん、私とて優等生ではない。単位を落とすことなどザラである。しかし私は正しく単位を落としている。勉強を怠れば単位を落とす。それが学びの場における正しい「空気」の一つだ。自慢するまでもなく私はその「空気を読めて」いるし、読めて当然だと自負している。

つまり誤解なきようお願いしたいのは、授業や試験はきちんと受けようという心がけを提案するものではないという点だ。本稿では、「場の空気を読む」とは何かについて述べているのである。直接的な行為については是非を問うていくのではない。

基本的に人間は他人に無関心である。注意をしたほうがいいと思う事象を見かけても、見て見ぬふりしてしまう。誰しも経験があるはずだ。関心がなければ、興味があれば、注意すらしてもらえないのだ。

だからこそ今のうち、「空気読めよ」と言ってもらえているうちを華と思う意識が必要であると、私は考えている。「空気を読めない」ことを、けてしてキャラや個性として片付けてはいけなさと、「多様性」の中に紛れ込ませて埋もれさせてはいけなさと、私は声を大にして伝えたい。



「1つの基準に縛られないで」

経済学部 1 年
古川正美

「どうして、私はヨーロッパの国に生まれなかったのかな」
「日本は劣っている。」
ときどきそんなことを思っていた。誰しも劣等感を感じることもあるだろう。私は先進国というイメージがあるヨーロッパと日本を比べ、劣等感を感じていた。しかし、ある教授の世界史の授業によって、この考えは覆されたのである。

教授は言った。「現在の世界史はヨーロッパ中心史観で語られている。これからは、あらゆる中心史観を超えた歴史の見方をしなくてはならない。」と。

ヨーロッパ中心史観とは、世界史においてヨーロッパを勝者とみなし、世界の中心でリードする役割を果たしてきたとする考え方である。例えば、エドワード・サイードは『オリエンタリズム』という書籍においてこう述べている。ヨーロッパが「先進的」「理性的」「能動的」であり、東洋は「後進的」「呪術的」「受動的」であると。日本でもヨーロッパは先進的で目指すべきものとされ、世界史の授業にその内容が組み込まれてきたのだ。

教授から学んだ内容は、とても衝撃的だった。今まで教えられてきた世界史の授業やメディアから発信される偏った考え方により、私の心の中に「ヨーロッパ中心史観」が埋め込まれてしまったことが分かったからだ。授業を受けるうちに沢山の事を知った。1つは、アジアを含む非ヨーロッパ地域はその地域に合わせた発展の仕方をしていったということ。2つめは、発展や豊かさを表す基準は1つだけではないということだ。各国の賃金は豊かさの基準となることが多い。しかし、国民総幸福量(GNH)で豊かさを表すブータン王国のように異なった基準で考える国もあるのだ。

非ヨーロッパ＝劣っているということは決してない。確かにイギリスは、世界で初めて産業革命を起こしたし、他のヨーロッパの国々も経済的な発展を遂げていった。しかし、だからといって非ヨーロッパと比べて優れた国というわけではない。なぜならそれは1つの基準でしかないからだ。

私は、授業をきっかけに「ヨーロッパ中心史観」という1つの基準に縛られた考えから抜け出すことができた。「ヨーロッパ中心史観」に限らず、1つの角度から見た基準に縛られることはとても恐ろしいことである。不確かなイメージを与え、様々な人種や考えを踏みつぶすことになる。過去には、消されていった文化や考えが多くあるだろう。このままでは1つの基準に縛られたままだと世界から多様性が消えてしまうのではないか。そうならない為に、私たちは1つの基準や角度から物事を見る必要がある。そして、互いに違いを認め、尊重しあう必要があるのではないか。

私は、様々な角度から物事を見る力をつけたいと強く思っている。大学は、その力をつけるチャンスが沢山ある場所である。なぜなら、世界史の教授のように学問を様々な角度で見る人や様々な国の人、そして様々な考えをもった多様性溢れる場所だからである。だから、この四年間を大切に沢山の人と交流をして様々な考えに触れていきたい。